

ごみ白書 2025

環境とごみに対する意識と実態



はじめに

本レポートは、2025 年 3 月に実施した「包装容器リサイクルの意識調査」の結果をもとに、環境への意識やごみの分別に関する生活者の実態などを分析し、作成したものです。

<目次>

- 1. 環境への意識と、社会的な動きに対するごみへの意識の実態
- 2. ごみの分別に関する理解の実態
- 3. 商品購入時の環境に対する意識
- 4. まとめと提言

1. 環境への意識と、社会的な動きに対するごみへの意識の実態

(1) 環境への意識が高い人のイメージ（複数回答）

環境への意識が高い人のイメージとしては、「ごみ白書 2024」での調査結果と同様の傾向がみられ、「真面目な人」「丁寧な暮らしをしている人」と回答した方が 4 割前後で上位に挙げられました。

また、「真面目な人」「責任感がある人」は男女ともに上位である一方、「丁寧な暮らしをしている人」「責任感がある人」「思いやりがある人」は特に女性からの支持が高くなっています。

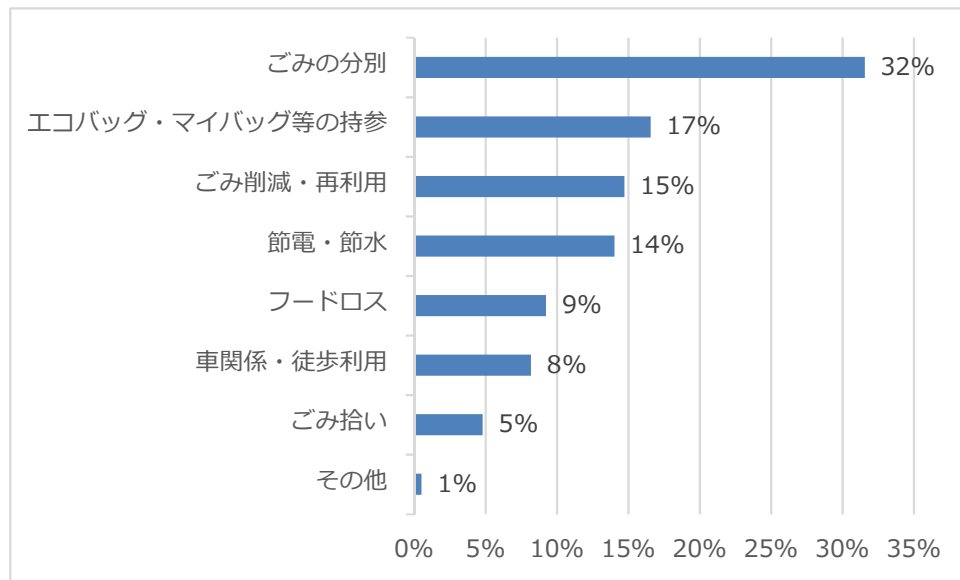


※「全体」のスコアで降順にソート

（２）環境に良い行動の中で、人に自慢できると思うもの（自由回答）

「あなたが行っている環境に良い行動の中で、人に自慢できると思うものを教えてください。」という自由回答の設問に対しては、全体の６割弱の方より回答をいただき、その中で「ごみの分別」と回答する方が３割を占めていました。その他、「エコバッグ・マイバッグ等の持参」「ごみの削減、再利用」「節電・節水」の回答がそれぞれ２割弱という結果でした。

「ごみ白書 2024」でも「ごみの分別」「エコバッグ・マイバッグ等の持参」「節電・節水」と回答する方が多く、人々が環境に良いと考える基本的な行動となっていることが分かります。



（３）「SDGs の流行」「コロナウイルスなどの感染症の影響」「マイクロプラスチック問題」「脱炭素やリサイクルなどに関する企業 CM」により行った行動（複数回答）

ごみへの意識は、SDGs の流行などの社会的な動きに影響を受けています。これらの事柄によってごみへの意識が変わった人は、主に「ごみの量を減らす」「分別を徹底する」「リユースの仕組みを活用する」などの行動を取っていることがわかります。

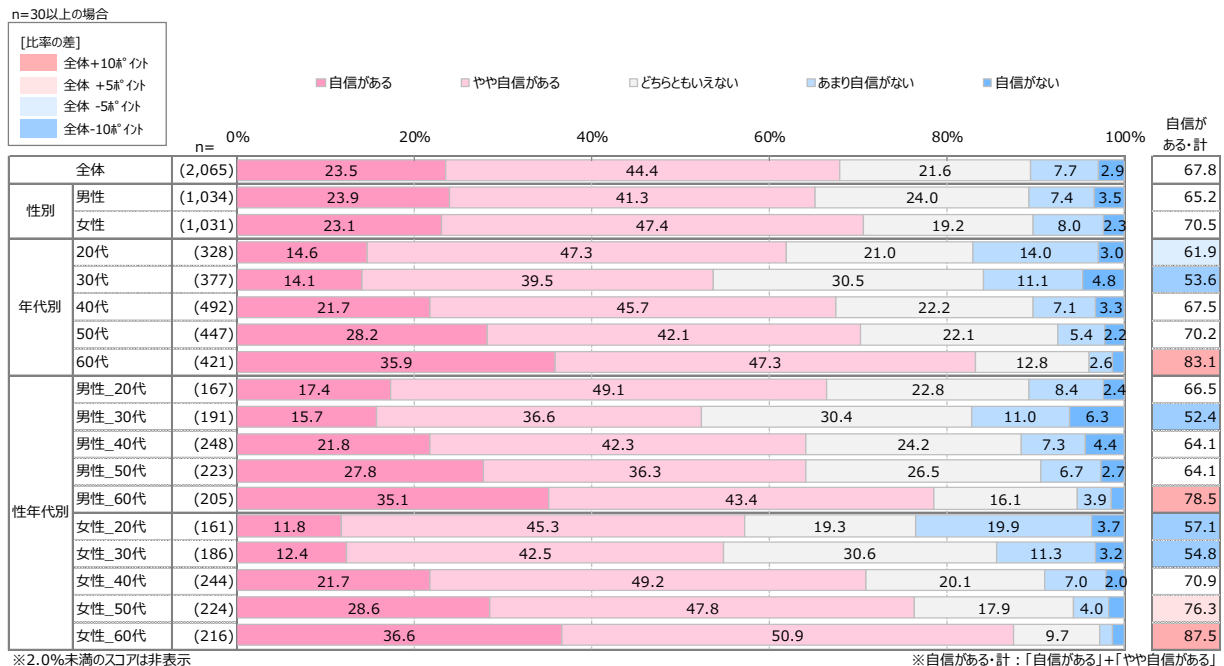
特にマイクロプラスチック問題でごみへの意識が変わった人は、「分別を徹底する」「ごみの量を減らす」のスコアが６割台と高く出ています。両方とも「ごみ白書 2024」での調査結果よりも、約４～６ポイント高まっており、マイクロプラスチック問題により影響を受けている人が増えたことが分かります。

n=30以上の場合		(%)								
	n=	ごみの量を減らす	分別を徹底する	リユースの仕組みを活用する	家族や友人とごみについて話し合う	家族や友人と協力してごみ捨てを行う	地域のゴミ拾い活動などに参加する	フリーマーケットやフリマアプリなどを活用する	その他	特に行動は変わっていない
SDGsの流行	(568)	58.3	56.7	34.9	12.5	14.8	10.9	23.1	0.7	5.8
コロナウイルスなどの感染症の影響	(695)	36.1	42.7	12.2	10.9	12.9	7.1	8.6	2.0	25.9
マイクロプラスチック問題	(631)	62.1	68.8	23.9	9.5	10.9	10.3	8.2	1.3	5.5
脱炭素やリサイクルなどに関する企業CM	(461)	58.4	55.7	31.7	11.3	16.3	11.5	19.3	0.4	8.5

2. ごみの分別に関する理解の実態

(1) ごみの分別について決まりを守っている自信があるか

全体でみると、7 割弱の方がごみの分別に対して自信を持っていることが分かります。特に、男女ともに 60 代の方が 8 割前後と高く、性年代別でみると、20 代を除いた 30 代から 60 代の年代すべてにおいて、男性よりも女性の方が自信を持っているという結果になりました。

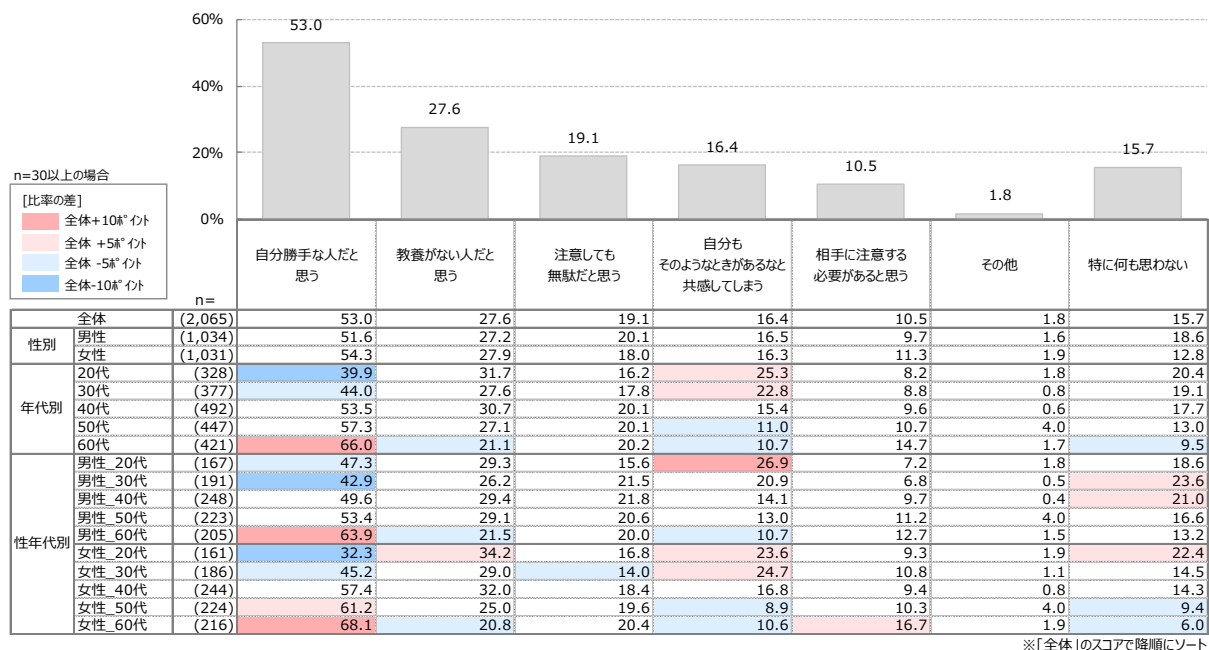


(2) ごみを分別しない家族や友人、同僚を見たときどのように思うか（複数回答）

ごみを分別しない人に対してどのような意識を持つか調査を行ったところ、「自分勝手な人だと思う」が 5 割を超えて最も高く、「教養がない人だと思う」が 3 割弱と続くなど、否定的なイメージを持つ人がみられます。

特に「自分勝手な人だと思う」と回答した人のうち、40 代以降は年代が上がるにつれてその回答割合が増加し、特に 60 代では、男女ともに 6 割を超えるなど、ごみ分別の重要性を感じていることが伺えます。

一方、20 代～30 代では「自分もそのようなときがあると共感してしまう」のスコアが全体と比較して高い結果となりました。「ごみ白書 2024」でも同様の傾向がみられましたが、シニア層のほうが分別についての意識がより高いことが分かる結果になっています。

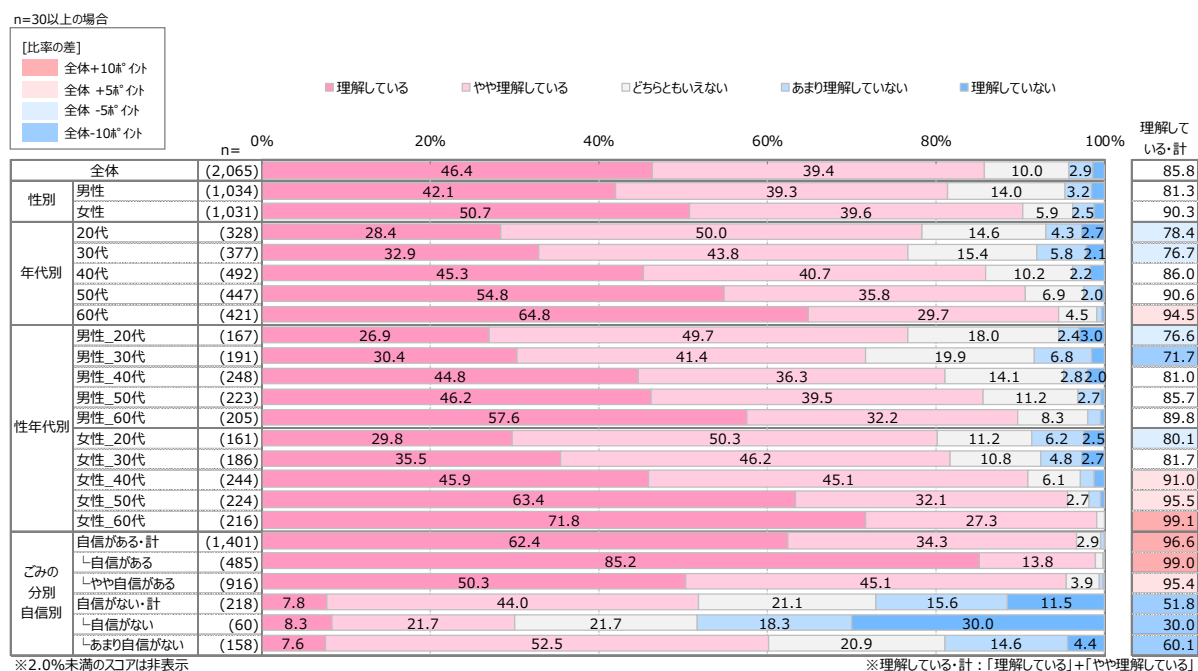


(3) 燃えるごみ※、資源ごみ、粗大ごみ、などの種別の理解

燃えるごみ、資源ごみ、粗大ごみなどの「種別」について理解している人が全体でも 8 割半ばと高い割合であり、2-(2)の設問に続き、この設問でもシニア層のほうがより理解度が高い結果となっています。

性年代別でみると、どの年代も男性よりも女性の方が理解している比率が高く、特に 40 代～60 代の女性においては、9 割以上と高い結果となっています。いずれも「ごみ白書 2024」でも同様の傾向が見られました。

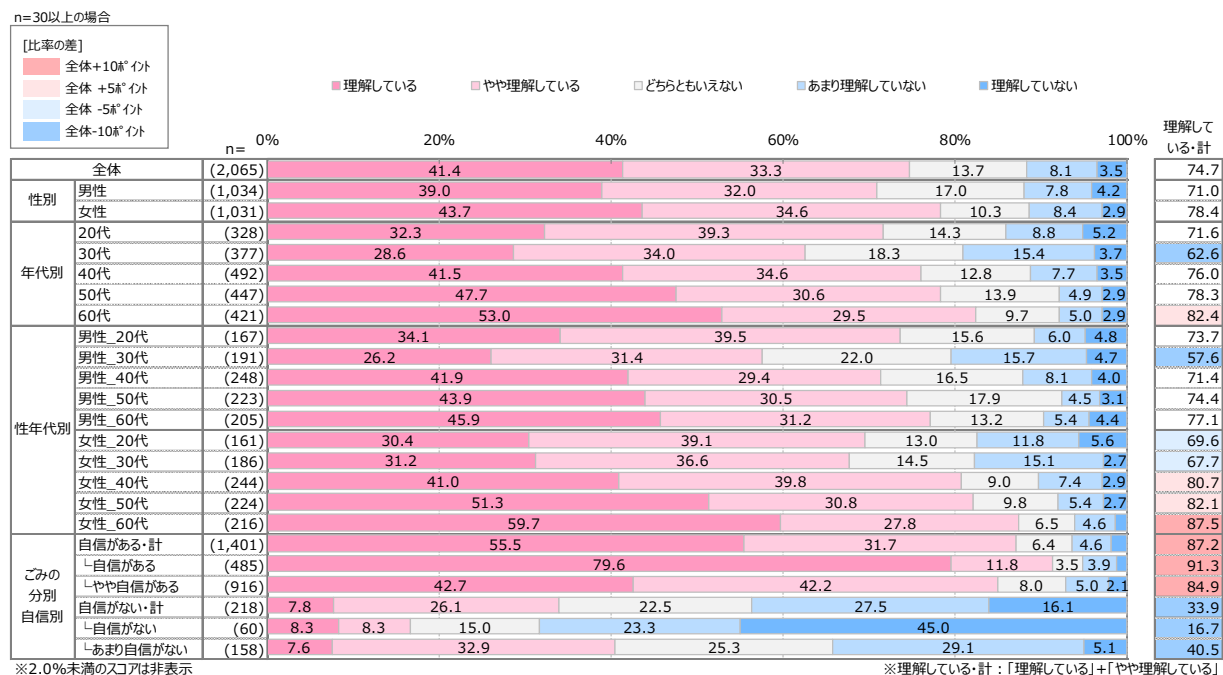
※地域によっては「一般ごみ」「普通ごみ」などと呼ばれています



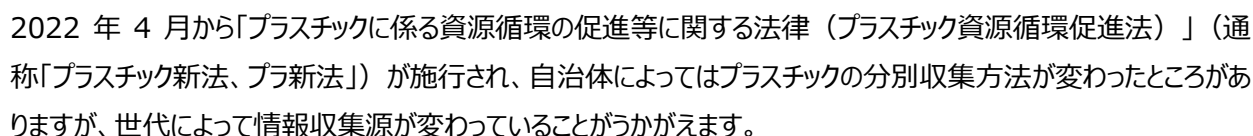
(4) ペットボトルとして捨てるボトルと、プラスチックごみとして捨てるボトルの種別の理解

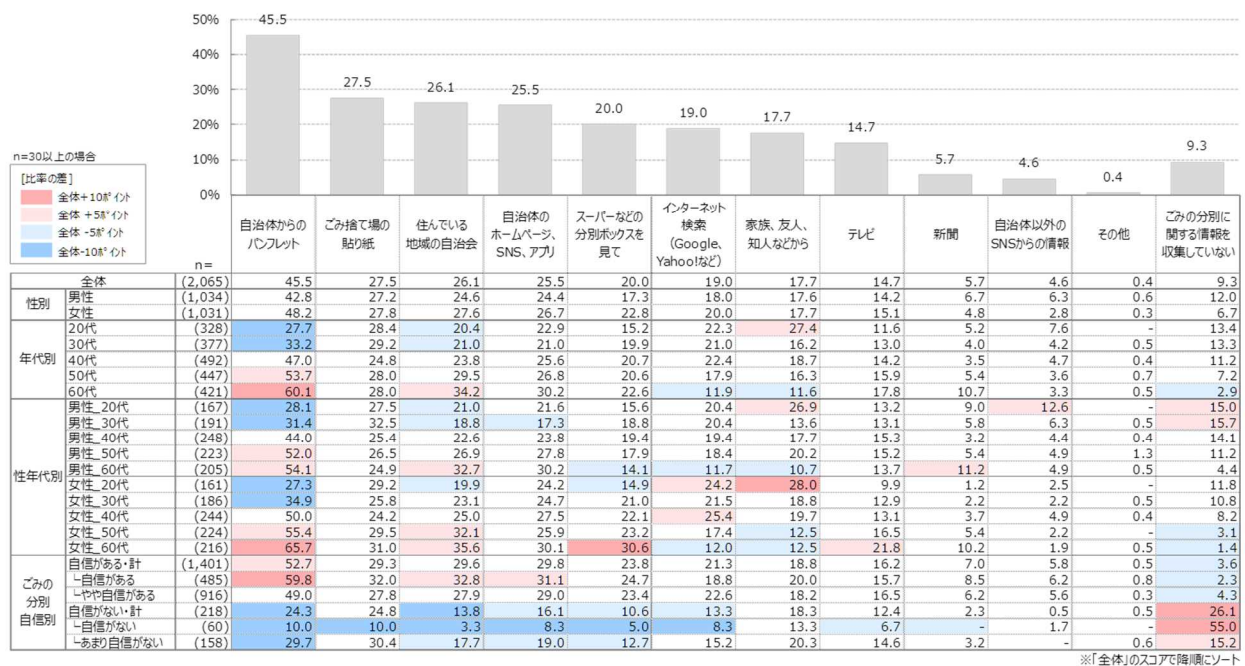
全体でみると、7 割半ばの人がペットボトルとして捨てるボトルと、プラスチックごみとして捨てるボトルの違いを理解している結果となっています。

性年代別でみると、理解していると回答した 30 代の人の割合が、他の年代と比較して 10 ポイント程度低い結果となりました。また、2-(1)の設問でごみの分別に自信があると回答した人のうち理解していると回答した人は 9 割を超えている一方、自信がない人のうち理解していると回答した人は 2 割弱と、大きな差が見られました。



「どの種別なのか区別がつかないものがある」との回答が 4 割半ばと最も多く、特に女性の回答の比率が高くなっています。また、「捨て方を調べずに捨ててしまうものがあるから」の回答については、「ごみ白書 2024」の調査結果に比べて、全体で 7 ポイント下がりました。男性については年代ごとに回答にばらつきがみられ、30 代・40 代で最も回答が多かったのは「特に理由はない／なんとなく」でした。



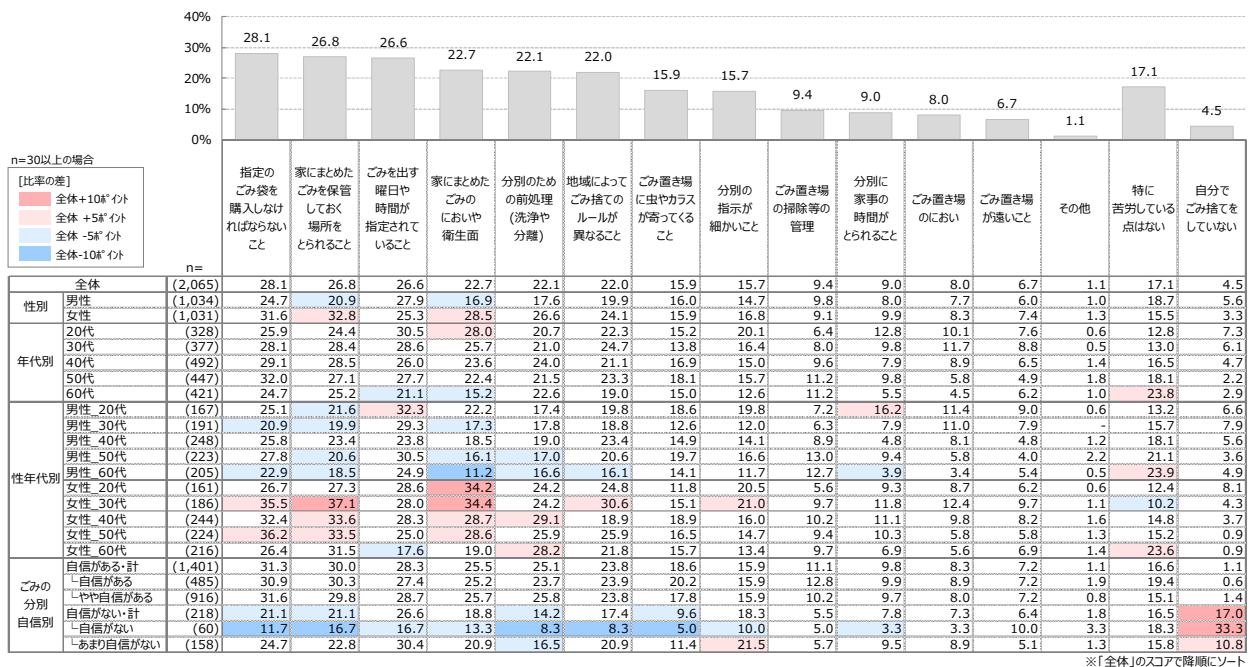


(7) ごみ捨てで苦労していること（複数回答）

全体でみると、「指定のごみ袋を購入しなければならないこと」「家にまとめたごみを保管しておく場所をとられること」「ごみを出す曜日や時間が指定されていること」が上位となっています。

性別では、女性は男性と比較して「家にまとめたごみを保管しておく場所をとられること」「家にまとめたごみのにおいや衛生面」のスコアが高くなっているほか、年代が上がるにつれ、「ごみを出す曜日や時間が指定されていること」のスコアが減少傾向にあります。

この傾向も、スコアに多少の変動はあるものの、おおよそ「ごみ白書 2024」と同様の結果となっています。



（８）分別しづらい、捨てづらいと感じるもの（自由回答）

「あなたのごみとして分別しづらい、捨てづらいと感じているものを教えてください。」という自由回答の設問に対しては、全体の 7 割の方より回答をいただきました。

様々な回答が見られましたが、その中でも「油や調味料の容器（サラダ油・マヨネーズ・ケチャップなど）」「不燃ごみ（乾電池・ガラス製品・金属製品など）」と回答された方が 5%弱となる結果でした。その他、「粗大ごみ（家具・家電など）」「アルミ缶・スチール缶・スプレー缶」「ペットボトル」と続きます。

全体的に明確な傾向はみられず、人によって、分別しづらい、捨てづらいと感じるものが異なるといった結果でした。

３．商品購入時の環境に対する意識

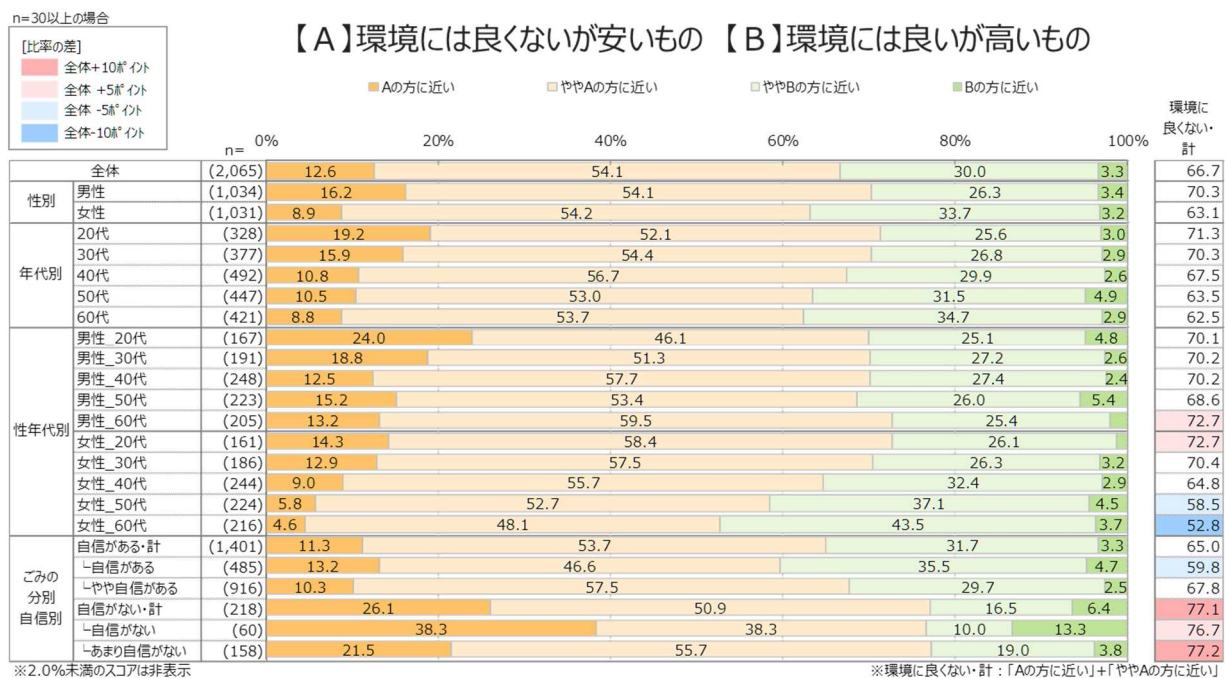
商品を購入する際に環境をどれだけ意識するかについて、価格と使い勝手の 2 つの軸から調査したところ、現状では、環境よりも価格を優先している人は 7 割弱、環境よりも使い勝手を優先している人は 8 割弱と、環境よりも価格や使い勝手を優先する人が多い結果となりました。

年代別に見ると、「環境には良くないが安いもの」「環境には良くないが使い勝手が良いもの」の比率は年代が上がるにつれ減少傾向にあります。いずれも「ごみ白書 2024」でみられた傾向と同様の結果となりました。

（１）環境と価格の比較

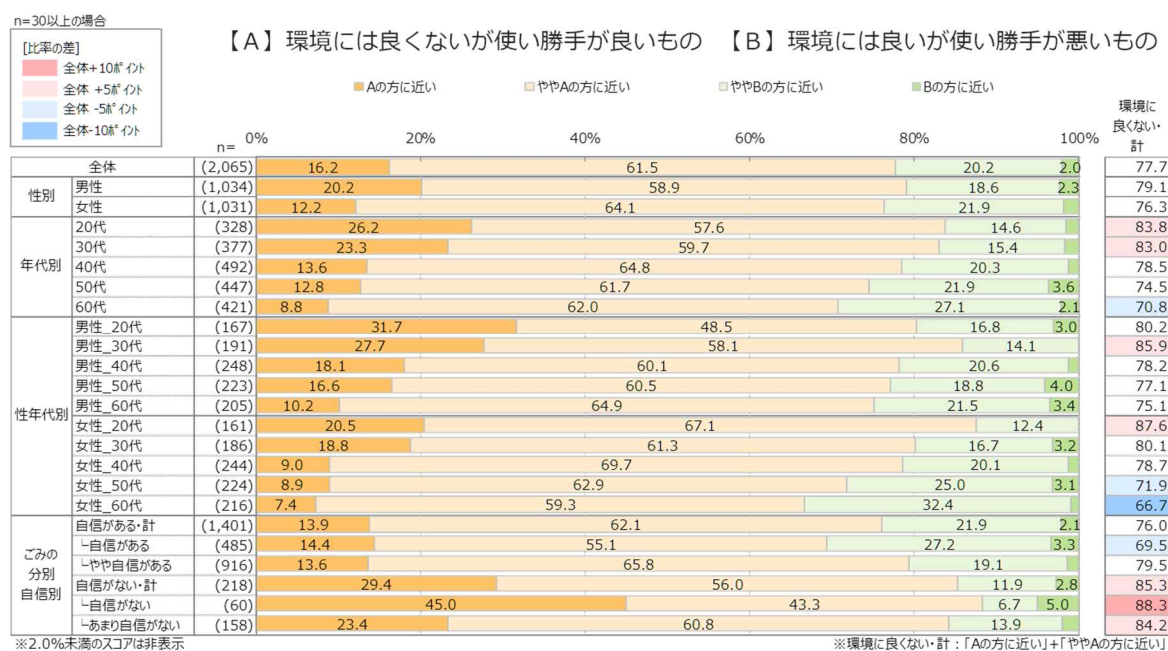
「環境には良くないが安いもの」を選択する方の割合が 7 割弱を占めます。

性別でみると、男性は女性と比較して「環境には良くないが安いもの」を選択する傾向があることが分かります。



(2) 環境と使い勝手の比較

「環境に良くないが使い勝手が良いもの」の割合が 8 割弱を占めます。性別で見ると、男性は女性と比較して「環境に良くないが使い勝手が良いもの」を選択する傾向があることが分かります。



4. まとめと提言

「ごみ白書 2025」の作成を通じて分析した環境とごみに対する意識と実態は、おおよそ「ごみ白書 2024」と同様の傾向が見られました。今回の調査結果をもとに、今後の方向性と提言をまとめました。

- 消費者の環境への意識は高まっているが、商品購入時の意識や行動においては価格や利便性が優先され、環境に配慮していない場合が多い。環境に優しい商品の価値やメリットを訴求することで、消費者の選択肢を広げることができる。
- ごみの分別については、理解はしているが自信がない人が見られる。分別の方法や意義をわかりやすく説明することや、分別しやすい容器を開発・提供することで、消費者の負担を軽減することができる。

包装容器のリサイクルは、環境保全や資源循環にとって重要なテーマです。東洋製罐グループは、包装容器の製造やリサイクルにおいて、環境に配慮した技術やサービスを提供しています。その取り組みや成果を消費者に伝えることができれば、より多くの人に環境に優しい商品を選んでもらうことができると考えます。

東洋製罐グループの環境への取り組みについて

東洋製罐グループは、金属や石油といった枯渇性資源から作られた原材料を加工することで、包装容器や鋼板などを製造しています。そのため投入材料を削減し、発生廃棄物の削減および再資源化を図るなど、資源を有効利用することは当社グループの大きな使命といえます。特に包装容器廃棄物は、環境省による 2023 年度の家庭ごみの組成調査で、容積比で約 64%含まれていることがわかっています。

当社グループの中長期環境目標である「Eco Action Plan 2030」では、資源循環社会の達成に向けて、「枯渇性資源の使用量 30%削減」を掲げ、活動を進めています。従前から実施している容器の軽量化に加え、再生材の積極的な活用にも取り組んでいます。金属缶における再生材使用比率の向上、プラスチック容器における再生材、植物由来樹脂の利用率向上は、「Eco Action Plan 2030」の目標達成、さらには社会的な課題の解決にもつながります。これらの活動は資源の有効利用だけでなく、材料製造時におけるエネルギー削減にも寄与するため、地球温暖化対策の観点からも重要な取り組みであると考えています。また、分別に適した製品設計開発や使用済み容器の回収を促進する仕組みづくりにも取り組み、サーキュラーエコノミーの実現に貢献していきます。

調査概要

調査対象 : 全国の 20 代～60 代の男女
調査地域 : 全国
調査方法 : インターネットリサーチ
調査時期 : 2025 年 3 月 6 日（木）～ 3 月 7 日（金）
有効回答数 : 2,065 サンプル
調査実施機関 : 株式会社マクロミル